



あの頃歌った校歌をもう一度―心をひとつに声を合わせて―

JASH

Japan Alumnae Association of the Sacred Heart

だより

2025 No.35

Courage and confidence!

AMASC 2022-2026



日本聖心同窓会

愛の泉のイエズスの／百合の香りにつつまれて



キリスト像のある庭。札幌聖心女子学院の校歌は、1969年に開校した2年制の英語専攻科(1997年休科)でも同様に歌われました

一九六三年に札幌の地に聖心の種が蒔かれ、中学校、小学校二年の小さな学校が開校しました。当初、校歌は無く、三光町聖心女子学院の校歌「愛の泉」を校歌として育つてまいりました。一九九三年三十周年の時、卒業生作詞による新校歌が出来、二つの校歌は大切に歌い継がれて、今日に至ります。残念ながら札幌聖心女子学院は、二〇二五年三月末に閉校となり六十二年の歩みが止まります。それに伴い、学校主催によるホームカミングデイが二〇二四年十月六日に開催され、一四〇〇名強の申込があり、当日二〇〇名程の来校者で、午前・午後二回のごミサは聖堂及び校内数カ所に同時配信され、校歌「愛の泉」、新校歌が歌われ校内に響きわたりました。この日は、参加した全員が同じ夢を見ていたのかと思います。二度と見ることがない夢だからこそ、皆様の心に残る何故か嬉しい幸せな時間が流れていたように感じました。



下は旧校門

沢山の元子供達が訪れて、何より学校がとても嬉しそうでした。

二〇二五年二月三日にウエルカム茂仁香に最後の同窓生を迎え、最後の校歌斉唱は二月八日第五十七回卒業証書授与式。

校歌「愛の泉」には、聖心のスピリットが網羅されていて、新校歌と共に皆様の心にあります。母校が懐しくなった時、思い出してください。

沢山の愛を注いで下さいました皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

茂仁香会会長 大八木かほる(茂1・宮23)



ホームカミングデイ 聖堂にて

今年10月に開催「JASHのつどい」

本号の校歌特集は、二〇二四年六月八日に開催した第一回「JASHのつどい」がきっかけとなり企画しました。

大学聖堂で、各姉妹校の校歌や愛唱歌、懐かしい聖歌を来場者全員で大合唱するという初の試みに、たくさんの方の反響をいただきました。何十年ぶりのハレルヤコーラスが、なぜか歌えてしまう不思議。初めて聞く校歌にも親しみを覚えるのは、姉妹校という絆があればこそ。時代も世代も一瞬で超える、歌の力を実感しました。当日の歌声は、左のQRコードから視聴できます。特集を読みながら、各校の校歌愛唱歌をぜひお聞きください。

二〇二五年度は、十月四日(土)に時期を移して、第二回「JASHのつどい」を開催の予定です。茶話会、パザー、資料委員会展示、JASH AMASC委員会動画上映もお楽しみに。詳細は近くなりましたら、JASH Webサイトでご案内いたします。



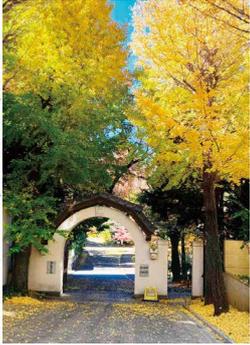
こちらのQRコードから、第1回「JASHのつどい」の動画、校歌集をご覧ください。



こちらから各姉妹校歌、懐かしい聖歌を聴くことができます。  
歌詞はeブックでご覧いただけます。

## 聖心女子学院

### 仰げば み空の果てなき光



正門は唯一残る創立当時の建造物。右はイエズス像



三光町の「聖心女子学院校歌」はヘンデルの曲に、高等専門学校(現聖心女子大学)でも教鞭をとられた、詩人で国文学者の尾上柴舟先生が作詞された。全く校名は登場しないものの、格調高く美しい詩文です。

この校歌は、一九二五年の第一回高等女子学校の卒業式で九名の卒業生によって歌われた、と「聖心女子学院創立五〇年史」に書かれていますので、二〇〇年以上歌い継がれてきている事になります。第二次世界大戦等を経たせい、残念ながら校歌の原本等の資料は見つかりませんでした。しかしながら、時には高等科の古文の授業の題材としても活用されている、と国語科の先生にお話したくほど、今でも生徒たちには愛されている曲です。

一〇〇年を経て今なお緑濃く美しい自然にあふれた学び舎、学生のあるべき姿を歌い上げる校歌「あふげばみそらの」は、いつも三光町の卒業生たちの心に、変わらぬ学校の姿を思い起させてくれます。

みこころ会会長 村上直子(み59・宮28)

## 聖心女子専門学校

### さつきさやけき 青葉のかげに

専門学校で校歌のように歌った愛唱歌「さつきさやけき」は、マザーが列聖式で歌っていたメロディに日本語の歌詞をつけたものだと言われています。

入学後のミサで各姉妹校によって、歌詞が違うことを知り、親交を深めたことは今も楽しい思い出として記憶に残っています。

聖マгдаレナ・ソフィア・バラのお言葉の「これからの子どもたちを通して世の中に神のみ心の力が花開くように」という思いがこの歌に入っているように感じるのには聖心で互いに愛し合う事を学んだからでしょうか。

二〇二六年、創立記念日みこころのミサでシスター山下校長様から「優しさ、思いやり、人に尽くすこと」を神の愛の内実として受けとめ、創立者の言葉を何か一つでも心に刻んで歩んで欲しいとの話がありました。

困難な時ほどこのお言葉を思い出して歩みを進めたいと思います。

三光会会長 岡聖子(下36・三保24)



2016年5月25日創立者記念みこころのミサ



保育科生が参列している様子

## 聖心インターナショナルスクール

### A World of Difference



Junior's choir

When I began preparing for the First JASH Gathering scheduled for June of 2024, I asked our new Headmaster Sr. Anne Wachter if we had a school song and if so, what the school song was. Her answer was like many. Nobody I spoke with was able to tell me the official title of a song. That is not to say songs are not sung at the school. It is quite the contrary. Music has always played a very important role from the beginning at the International School of the Sacred Heart. After all, music brings more joy and unity to a group of people who do not speak the same language. Some have said that "Coeur de Jesus" could have been the school song, but at the time Sr. Anne made an executive decision to pick "A World of Difference" to be the representative song for our school.

Most people who listen to this song say the "words are heartwarming". When I listen and/or see the ISSH children

sing this song, I am so overwhelmed by the beautiful melody and the innocent voices singing simple words of wisdom of hope for our future, I have tears in eyes by the third line. Nobody is sure when this song became the main staple for the school, but I can say from my experience and listening to experiences of others, that the education provided at ISSH is based on the lyrics of the song in its simplest form. The uniqueness of everyone is recognized, respected, and celebrated as an important member of a larger community and the world. Students with the ISSH experience see the world with the delicate balances of nature and know to make a difference in the world by bringing the positivity to life through her education based on faith with her service to the greater community.

語学校・ISSHアラムネ会長 Mayling Woo Clements('81)

富士山の裾野に、『聖心の森』と茶畑に囲まれた21万坪の静謐なキャンパス

聖心会裾野修道院の新しい建物 Philippine Duchesneが、生徒たち・教職員などとの新たな交流の場となっています

学校法人聖心女子学院  
不二聖心女子学院  
中学校・高等学校  
Fuji Sacred Heart School  
Middle School & High School

International School of the Sacred Heart

Growing with Courage and Confidence

info@iss.ac.jp www.iss.ac.jp



## 聖心女子大学

### はばたけ 若いいのちよ

聖心女子大学の校歌「若いいのちよ」は、一九七三年大学創立二五周年を記念して制定され、翌年の一九七四年三月の卒業式で初披露されました。それまでの式典には「信望愛」の歌が歌われていたと聞いています。

美しい旋律と躍動感のあるこの校歌は團伊玖磨氏が作曲しました。第一回「JASHのつどい」があった二〇二四年は團伊玖磨氏生誕一〇〇年の記念の年でした。校歌で繰り返し歌われる ウビ カリタス、イビ デウス「愛といつくしみのあるところに、神在す」という言葉は、大学のモットーであり、校章や宮代会のロゴにも書かれている。いつの時も心に留めていたい言葉です。

宮代会会長 藏原 由季子(小み53・宮35)



校の大学正門



学内に飾られているお言葉

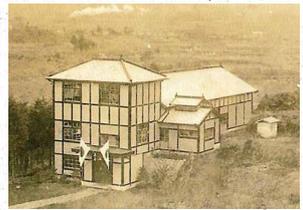
## 不二聖心女子学院

### あまそそる 富士の高ねし

不二聖心の校歌は、もともとその前身である「聖心温情舎」の校歌として誕生しました。一九二〇年に実業家の岩下清周氏が創立した「温情舎小学校」が一九四六年に聖心会に引き継がれ、一九五二年に聖心修道会が裾野の地に設立されたのを機に「聖心温情舎」に改称されています。校歌はおそらくその頃に作られたものでしょう。

作詞はフランス文学者で南山大学名誉教授の木村太郎氏。岩下壮一神父を慕って桃園(裾野市)に移り住み、聖心温情舎でも社会学の教諭として教鞭をとっていました。作曲は教会のオルガニストであった松井寿喜子氏。東京で幼稚園を経営していた松井氏は、戦災のため一時期岩下家に身を寄せていたようで、校歌の誕生には岩下家の存在が大きく関わっていたことがよくわかります。一九五七年、校名が「不二聖心女子学院」になると、歌詞は「ああ われらが学び舎 聖心温情舎」の校名の部分のみが「不二聖心」に変更され、今日まで歌い継がれています。

ドウシエン会会長 大年 寿子(下31)



「ああわれらが学び舎 聖心温情舎〜」



大自然に囲まれた不二聖心の校舎

## 小林聖心女子学院

### 朝に夕に鳴る鐘の

二〇二三年の学院一〇〇周年記念コンサートでは、オーケストラ伴奏で全員で歌った校歌が会場に響き渡り胸が熱くなった。生徒時代は呪文のように難しい歌詞、高音で、変調もありと、歌い上げるには苦労した思い出がある。

小林の校歌は、聖マクダレナソフィア・バラが福者に列福された際に作られた、オーストリアの作曲家による「聖心会の創設者 福者マザー・バラの栄誉の祝祭歌」という曲が原曲で、小林の創設者マザー・マイヤーが来日の際にその楽譜を持参されこの曲が校歌となったと推察されるそう。このことは、二〇〇三年小林の修道院で古い音楽ノートに原曲の楽譜が発見され、そこに書かれたメモなどから、作曲家と聖心会つながりがわかり、原曲の祝祭歌と校歌が同じメロディーであることも確認されたことで明らかになった。作詞は誰なのかはいまだに明確ではなく、何回かの変更のち現在の歌詞となった。

そして、聖マクダレナソフィア、マザー・マイヤーへと、今も受け継がれていることに驚きと誇りを覚える。

校歌楽譜、『小林みこころ会会報』35号に詳細が掲載されている



校歌原曲楽譜



マザー・マイヤー

(『小林みこころ会会報』35号より)

小林聖心女子学院 小学校・中学校・高等学校

Come and See Dayでお会いしましょう

◆5月3日(土)学院祭Come and See Day 開催  
◆卒業生向けの最新情報を、小林聖心公式Instagramで公開中!

聖心女子大学

再び、学びの世界へ  
公開講座情報等、詳細は公式WEBサイトを  
ご覧ください。

多様に、グローバルに、より良く生き抜く。

聖心女子学院 SACRED HEART SCHOOL  
初等科・中等科・高等科  
2026年度入学試験:初等科1年 / 初等科5年転入・編入 / 中等科1年帰国生



## JASH 会長挨拶

日本聖心同窓会会長  
ラウリア 佳子  
(み 64・宮 33)

二〇二四年度は、六月に「JASHのつどい」と銘打って、新たに会員のホームカミングを開催いたしました。大学聖堂で、姉妹校校歌、懐かしい聖歌、最後はハレルヤコーラスの大合唱。思わず目頭が熱くなったのは私だけではなかったようです。この時、各同窓会会長の母校の校歌に関するお話が素晴らしく、これはぜひ会員皆様と共有しなければ、と今号の「JASHだより」巻頭の特集に繋がりました。

この一年、JASHの同窓会にも様々な変化がありました。三光会は休会することが決まりました。茂仁香会は母校札幌聖心が閉校になりました。同窓生の中には、たくさんの思い出と共に自分の一部が切り取られるような、痛みと寂しさを持たれた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

JASHは、世界の聖心姉妹校同窓会と日本の同窓会を結ぶ役割を担っていますが、同時に日本の各同窓会を繋ぎ束ねる役もある、と近頃よく申し上げております。ご自分の所属同窓会の活動が止まってしまっても、JASHがあるさ！と思つて下さい。資料委員会・ホスピタリティー委員会・JASH AMASC委員会にも、いつでもご参加いただけます。

これからも全てのJASH同窓会が、手を携えて共に歩んでいきますように、役員会も活動をしていきたいと思つています。



## JASH 名誉会長挨拶

聖心会日本管区管区長  
シスター  
宇野 三恵子  
(み 54・宮 23)

私の好きな詩の一つに、過日亡くなられた谷川俊太郎さんの「生きる」という詩があります。心が落ち着かないときに、ふと思ひ出します。「生きていくということ 今生きていくということ」という繰り返しの日常生活の描写の合間に、「あなたと手をつなぐ」と「隠された悪を注意深く拒むこと」といったメッセージが響いてきます。そして「人は愛するということ、あなたの手のぬくみ、命ということ」という結びに、心が洗われる思いがします。

谷川さんはある対談で次のように仰っています。「僕は若い頃から『生きる』ことと『生活する』ことを区別していました。人間にとつては生活よりも生きることの方が大事です。生活するということは、どうしても社会との関係で、給料をもらつたりとか、人とつきあつたりすることが必要でしょう。生きるというのは、人間も哺乳類の一つとして、命をもった存在として、宇宙の中で生きるということ。自分が宇宙の中の存在であると同時に、人間社会の中の存在であるという二重性がある。」

不安に満ちた社会の中で、私たちは翻弄されて生きています。人間社会の一員として日常を過ごしながらも、命をもった存在として、「生きる」意味を保ち続けたいものです。

## AMASC ヨーロッパ大会

### オーストリアの首都ウィーンの聖心で充実の4日間

2024年10月3日から6日まで、AMASC(世界聖心同窓会)ヨーロッパ大会が開催されました。オーストリア、フランス、スペイン、ドイツ、ベルギー、オランダ、アイルランドの同窓会と、併せてアメリカ、エジプト、コンゴからのAMASC役員、そして私達JASHも参加いたしました。

今期のAMASCのテーマ“Courage and confidence!”(勇気と自信)について世界の同窓会の意見を聞き、hospitalityとmentoringについての意見交換、各国同窓会の活動報告をしました。若い世代が同窓会活動に参加しない傾向にあるのは万国共通のようで、各国が取り組むアイデアを共有するなど充実した話し合いができました。聖堂では高校生の劇や小学生の歌も披露され、国を超え世代を超えて、親睦を深めた4日間となりました。

現会長国であるアメリカで開催予定の、2年後の世界大会での再会を約束して、それぞれ帰国の途につきました。

中込 伊都子(三英27)  
川辺 祐香(小み56・宮40)



写真左側手前が聖心の聖堂



- 1 全員集合!
- 2 聖堂にて。生徒たちの後ろには聖マグダレナ・ソフィアの御影
- 3 「伝統として国際的に」と書かれた聖心のロゴを飾ったケーキ
- 4 姉妹校交換プログラムに札幌聖心が紹介されていました
- 5 高校生による4か国語のオリジナル演劇(聖書の箇所と現代社会の環境・戦争と平和問題を絡めたシナリオ)
- 6 ウィーンの聖心は男女共学です

from  
資料委員会

## お宝写真館

### FEAST BOOK

フィーストと呼ばれる修道院長様、校長様の霊名の祝日には授業はなく、ウィッシングが行われました。生徒たちは英語の教科書の短いお話や詩、散文、あるいは2~3行の文章などを丁寧に聖心独特の書体でペン書きし、挿絵で飾り、表紙に絵を描き、FEAST BOOKと題字を入れ、リボンで結ぶなどして美しい作品にしました。この行事は1960年代中頃まで行われていました。



独特の筆記体で綴られた、美しいFEAST BOOKの数々

資料委員会では寄贈していただける資料を募集しています。

[シリーズ] 同窓会活動の場を訪ねて⑦

## 三光会室

聖心女子専門学校の同窓会である三光会は、1968年「ドゥシェーンアンソシエーション」として発足(日本聖心同窓会『絆』より)、1974年同窓会の名称を「三光会」と改称しました。

私たちが役員になり引き継ぎのために学校を訪れて驚いたことが、打ち合わせの場所が校長室だったことです。それは、学校の閉校(2018年)により、役員が集まれる場所がなくなることから、シスター山下まち子校長様(当時)が、三光会のために校長室を使うことをご提案して下さいましたからだそうです。

昔は入ったことがなかった校長室に足を踏み入れ、シスターとお話をさせていただく時間は、学生時代にタイムスリップしたような緊張と安心感に包まれた素敵な時間でした。

三光会は2024年3月に休会となりましたが、歴代の三光会会長とお会いし、学校の歴史を感じ、皆様の学校や三光会への愛を感じる事が出来た素敵な2年でした。

三光会会長 岡 聖子(ド36・三保24)



シスター山下、金先生とご一緒に将来検討委員の皆様との会議

シスターと追悼ミサの打ち合わせ

### Activities

## 委員会活動

### JASH-AMASC委員会

JASH Webサイト/YouTubeにて、里親ホームを運営していらっしゃる吉成麻子さん(み70・宮39)への卒業生インタビューの動画配信を引き続き行なっております。また、JASH公式Instagramへ、約30年前に発行された『COOKBOOK』のレシピを再現したお料理の投稿を始めました。食を通じて世代、国を越えた繋がりも模索できたらと考えております。



卒業生インタビュー撮影風景

宮代祭、札幌聖心にてチラシの配布

### 資料委員会

2024年6月の第1回「JASHのつどい」で行った写真展示「聖心姉妹校のあゆみ」は、大勢の同窓生にお楽しみいただきました。また、通常業務である資料の記録のデータ化にあたり、初の試みとしてJASHボランティアを募集し打ち込み作業をお手伝いいただきました。今後もボランティアのご協力を得て、作業の迅速化を図りたいと考えています。



「JASHのつどい」展示準備を終えて

### ホスピタリティ委員会

2024年6月「JASHのつどい」での茶話会を担当。初開催の為、試行錯誤の会場レイアウトと茶菓子の選定でした。当日は会場設営に沢山のボランティアのご協力をいただき、茶話会も笑顔に溢れ、大変盛況でした。

秋に新委員も迎え、聖心会クリスマスミサでは、ココアサービスのお手伝いを致しました。今年度、外国からのお客様はありませんでした。



ボランティア登録を通してご協力をお願いしています

### ■JASH ボランティア募集

「JASHのつどい」などのイベントの手伝い、翻訳、通訳(英語・仏語・西語ほか)など、JASHの活動のお手伝いをしてくださるボランティアを、常時募集しています。

申し込みは、JASH Web サイト「JASHボランティア募集」よりどうぞ。

### 古切手を集めています!

AMASCは各国の同窓生から古切手を集めています。スペインの同窓会が古切手市場で換金して、AMASCの活動に役立てています。使用済み切手の周囲を5ミリほど残し、JASH事務室までお送りください。未使用切手も歓迎です。

## 聖心会 みこころセンター



共に学び、祈り  
分かち合う場

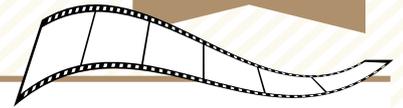
〒108-0072 東京都港区白金4-11-1  
TEL・FAX: 03-6277-2561  
メール: rscjmikokoro.center@gmail.com  
HP: https://www.m-sacred-heart.com/

## 学校法人聖心女子学院 生涯学習センター

「いつでも、どこでも、誰でも学べる」それが生涯学習です。  
緑豊かな広尾のキャンパスの中で楽しく学びませんか?



# 姉妹校はじまり物語



## A Tale of the Sacred Heart Schools in Japan



聖心女子学院外国人部(通称 語学校)全生徒 本館前 1916年～1917年  
右列ともに写真: JASH資料委員会所蔵

Once upon a time there were four very different women who set sail from Sydney, Australia on December 4th, 1907, upon the Nikko Maru with a mission set by Saint Madeleine Sophie Barat to extend the Society through the service of education encompassing the criteria to believe, learn, serve, connect and grow. Their names were Bridget Heydon, Mary Scroope, Elizabeth Sproule, and Mary Casey. They landed in Yokohama on January 1st, 1908, and found their way to Kogaicho Azabu on the 2nd to what was to be the first Sacred Heart establishment in Japan. None of the ladies had any idea or prewarning for the cold climate, very different culture, and living standards. They arrived at a very empty house eventually to be sleeping on futons on the floor and removing shoes with every entry into a home. Despite all their daily challenges and hardships, records showed they all showed undeniable “joy and merriment” in their new home.

Mother Josephine Goetz, the immediate successor to Saint Madeleine Sophie, instructed her sisters traveling abroad to “Learn promptly the language and customs of the country. Criticize nothing. Constantly give the example of humility, modesty, and abnegation. Don’t make quick judgements nor appear to know it all.” Perhaps these instructions she gave to her “foreigner” sisters trying to assimilate in the Japanese culture contributed to the sisters’ success to establish the

Sacred Heart Society in Japan.

A second wave of eight teachers soon arrived from Europe. Two were from Ireland, two from France, two from Belgium and two from England arrived on February 8th which forced them to a larger space in Hiroo. On April 13th, 1908, the first students to Gogakko or “Foreign School” were welcomed to what would later become the International School of the Sacred Heart.

Mother Heydon was known to love to sing while Mother Isbeque from Belgium played the piano. Songs in different languages could be heard echoing from the school. Music is, after all, a universal language everyone can enjoy. Without being able to speak the language, the sounds, emotions and lyrics can easily be remembered.

As the school grew, the campus moved to Shirokanedai, the current location of Sankocho Japanese Sacred Heart School. The school did not move to Hiroo until 1948 and officially became the International School of the Sacred Heart. The iconic Tange building was completed in 1968 with additions made in 2011. Currently the school is preparing to renew the buildings to better educate the children for the future. The beauty of seeing so many young ladies have a high level of basic education, understanding of her own character, principles, and a guidance based on faith is priceless. Furthermore, the positivity born from this is endless. So, the tale of the Sacred Heart schools in Japan and around the world continues.



インターナショナルスクール授業風景 終戦後



ISSH 110th Anniversary Celebration



Class of  
2024 Seniors Day  
of Reflection

聖心  
インターナショナル  
スクール

語学校・ISSHアラムネ会長 Mayling Woo Clements (1'81)

## 初代学長マザー・ブリットの精神を心に

イエスの聖心の愛を、教育を通して全世界に伝え、混乱する社会を変えていきたいという創立者、聖マグダレナ・ソフィア・バラのお志の芽は、日本においては、一九二六年（大正五年）発芽し、一九四八年（昭和二十三年）新制大学として、渋谷の地に発足した聖心女子大学となって枝葉を広げていった。

最初に蒔かれた小さな種には、大きな希望が託されていました。  
姉妹校それぞれの、知ってるようで知らない創立の頃の物語を紹介します。

大学発足にあたり、当時の候補地として少なくとも、①三田の三井倶楽部、②麻布の三井本家邸宅跡、③李王家御殿（現在の東京ガーデンテラス紀尾井町）、④芝の伊達家邸宅、⑤中島飛行機工場跡（現ICU）、⑥元久邇宮御殿の6か所があったと言われている。このうち①は建物は立派であるが用地が狭いのであきらめ、②は高台に名石が散在する見事な敷地だったが戦災で建物がないことから、本契約の直前に断念せざるを得なかったという。最後に残った候補地が現在本学の所在する⑥であった。同地は江戸時代の下総佐倉藩堀田家の下屋敷跡であり、一九一七年に久邇宮家の本邸が建設された。戦後、土地は国が管理していたが建物は大映の所有となっており、時代劇映画のロケ、従業員宿舎などに使用されていた。同社の永田雅一社長は学院側の申し入れに対し即座に快諾され、一九四七年十二月に購入契約が行われた。桜の並木に導かれて入る約二万四千坪の広大な敷地は緑濃く、由緒ある御殿のまわりには蘭の温室や池が配され、風雅な趣であった。敷地はその後一九四八年から一九五四年にかけて順次購入し、一九六九年にはインターナショナルスクールとの間で校地分割区分を決めている。一九六六年に渋谷区が住居表示変更をする以前、大学の所在地は現在の「広尾四丁目三番二号」ではなく、「宮代町一番地」であり、この旧町名にちなみ「聖心女子大学同窓会」は一九六九年に「宮代会」に改称した。



1号館（1950年竣工）、修道院（1951年竣工）の全景

宮殿下、久邇朝融氏、李王妃、東伏見慈治氏をはじめ、教皇使節パウロ・メラ大司教、本学全理事、内外要人、教授団、学生、父兄、聖心関係者等約三五〇名が列席した。シエルドン管区長、ブリット学長の挨拶の後、祝辞があり、学生の景山あき（宮1）が謝辞を述べた。日本初のカトリック女子大学の記念すべき門出であった。式後、聖堂で土井大司教司式のベネディクション（聖体降福式）およびクニハウスと庭園での茶菓接待があり、美しい春宵に新しい大学の誕生を心から喜びあった。

マザー・エリザベス・ブリットは戦後の瓦礫のなから国際的にも開かれた新たな大学を誕生させ、卓抜した指導力と実行力をもって度重なる財政的苦難を乗り越え、5期にわたる校舎の建設、教育学科の新設、大学院の新設、初等教育学専攻の新設等々、本学の発展を力強く推進し、今日にいたる揺るぎない基礎を確立することに貢献した。そこには優れた経営的手腕、教育的情熱とともにキリストの愛に対する深い信仰があった。また、婚期の遅れを心配して大学進学を許さない風潮の残る時代にあえて進学した学生の意欲と向学心はたくましく、草創期の学生がパイオニア的な意気込みで道を開くと、多くの学生がこれに続き、マザー・ブリットの期待に応えた。



1954年ごろの本館中庭の様子



聖心女子大学本館落成式。本館屋上



1951年聖心女子大学第1回卒業式



聖心女子大学第1回卒業生

参考資料「聖心女子大学1916〜1948〜1998」（一九九八年発行）  
写真：JASH資料委員会聖心女子大学アーカイブズ所蔵

## ■役員会

毎月第1土曜日(7月Zoom、12月第1火曜日、2月第2水曜日) 全11回(8月以外)

## ■理事会

5月・10月・12月・1月・3月第3火曜日(7月Zoom) 全6回

## ■第1回「JASHのつどい」開催：6月8日

- ・第一部 校歌・愛唱歌・聖歌の合唱(大学聖堂)
- ・第二部 茶話会・バザー・資料委員会展示・JASH-AMASC委員会動画公開(大学学食B)

## ■第39回「JASHの日」Webサイト開催

- ・「JASHの日」について関連記事掲載(2025年3月16日～31日)
- ・姉妹校同窓会・委員会活動報告動画配信(2025年3月16日～年末まで)

## ■情報の発信

- ・Webサイト、インスタグラムの運営：随時
- ・JASH紹介動画の貸出、JASHリーフレット配布：随時
- ・「JASHだより」34号発行(4月1日)、35号発行準備
- ・卒業生インタビュー動画公開(JASH-AMASC委員会)

## ■姉妹校同窓会行事への参加

- ・総会：ドゥシェーン会(5月11日) 小林みこころ会(5月25日)
- ・バザー：宮代祭(9月7日) みこころ会社会福祉部チャリティー講演会(11月9日)
- ・追悼ミサ：みこころ会(11月16日) 宮代会(11月19日)
- ・同窓会：語学校・ISSHアラムネ(6月14日) 小林みこころ会東京支部(10月12日)

## ■学校行事への出席

- ・卒業式：聖心インターナショナルスクール(5月31日)
- 札幌聖心女子学院(2025年2月8日)
- 聖心女子大学(2025年3月15日)

## ■その他

- ・新規グッズ「JASH防災ボトル」の制作：9月～販売開始
- ・JASHグッズ販売：オンライン(下記、QRコード)、バザー等随時
- ・古切手：整理随時、スペインへ発送(2025年2月)



JASH防災ボトル

## Attention

# 「決算報告書及び予算」の閲覧方法が変わります!

2024年度より、JASHは決算期間を4月1日～3月31日に変更したため(2024年度のみ1月1日から翌年3月31日)、「決算報告書及び予算」を「JASHだより」には掲載しないことになりました。閲覧ご希望の方は

メール	jash@u-sacred-heart.ac.jp
FAX	03-3407-0671
ハガキ	〒150-8938 東京都渋谷区広尾4-3-1 聖心女子大学内 JASH事務室宛

いずれかの方法で、お名前、所属同窓会回生、住所、ご連絡先を明記のうえ、ご連絡ください。なお、毎年「JASHのつどい」では前年度の決算報告書及び予算を配布致します。

## Members

# 2024年度 理事会メンバー

■ JASH名誉会長	Sr. 宇野 三恵子 管区長 (み54・宮23)
■ 聖心会代表	Sr. 田中 玲子 (み44・宮13)
■ JASH会長	ラウリア 佳子 (み64・宮33)
■ JASH副会長	上野 愛子 (み58・宮27)
■ JASH副会長	謝敷 仁美 (み62・三英32・宮33)
■ JASH書記	佐野 由佳 (ド28・宮36)
■ JASH書記	高島 曜子 (ド27・宮35)
■ JASH会計	太田 里架 (み56・宮38)
■ JASH会計	岡森 あかね (み56・宮38)
■ JASH監事	上田 佳代子 (み52・宮34)
■ JASH監事	佐々木 裕美子 (茂18・宮40)
■ 茂仁香会会長	大八木 かほる (茂1・宮23)
■ みこころ会会長	村上 直子 (み59・宮28)
■ 三光会会長	岡 聖子 (ド36・三保24)
■ 語学校・ISSHアラムネ会長	Mayling Woo Clements (I81)
■ 宮代会会長	藏原 由季子 (み53・宮35)
■ ドゥシェーン会会長	大年 寿子 (ド31)
■ 小林みこころ会会長	辰巳 淳子 (み55)
■ 茂仁香会東京支部長	西島 ゆき子 (茂24・宮46)
■ 小林みこころ会東京支部長	奥寺 佐智子 (み61・宮43)
■ ホスピタリティ委員会委員長	小泉 マヤ (み62・宮31)
■ 資料委員会委員長	吉川 富久子 (み51・宮33)
■ JASH-AMASC委員会委員長	王 玲華 (み84・宮54)

## Activities

# 海外における「日本聖心同窓会(JASH)会員の集い」

日本の聖心同窓生は、世界各地で暮らし、活動しています。その中でも、下記の地域には「JASH会員の集い」があり、親睦を深め、助け合う場となっています。JASHでは、それぞれの地域の代表者の連絡先を管理しています。また、宮代会海外支部(シンガポール、ワシントン、南カリフォルニア)でもJASH会員と一緒に活動しています。

海外生活を始める方は、渡航前にぜひ、JASHにお問い合わせください。各地域とお繋ぎいたします。

## ■海外「JASH 会員の集い」の所在地

アメリカ合衆国	ニューヨーク
	サンフランシスコ/ベイエリア
	シカゴ
	アリゾナ
英国	
フランス	パリ
ドイツ	
オーストラリア	シドニー
タイ	バンコク

※左記以外の地域で活動されている同窓生のグループがありましたら、JASHにご登録ください。

「JASHだより」やJASH Webサイトで、グループの存在をJASH会員に広くお知らせし、新しく渡航される同窓生との橋渡しをします。

※各地の活動報告は、JASH Webサイトに掲載しています。



ニューヨーク(左)、ドイツ(右)の集い。2024年度は各地で親睦会が再開された1年でした



Japan Alumnae Association of the Sacred Heart

# JASH だより 2025 No.35

JASH Web サイト [jash316](http://jash316) 検索

JASHに関する情報をいち早く掲載しています。ぜひ、ご覧ください。



AMASC Web サイトは [こちら](#)



発行日 2025年4月1日  
 発行所 日本聖心同窓会(JASH)  
 発行人 ラウリア佳子  
 編集 JASH役員  
 住所 東京都渋谷区広尾4-3-1  
 聖心女子大学 JASH事務室  
 F A X 03-3407-0671  
 制作 (株)梁プランニング

学校法人聖心女子学院教育ネットワーク  
 Sacred Heart Five Sister Schools



日本国内の聖心姉妹校のフェイスブックページをご存知ですか? ぜひご覧ください。

<https://www.facebook.com/SeishinNetwork>

学校行事など日頃の学校の様子やトピックスを中心に姉妹校5校の様々な情報を発信しています。